



TKK 共通シラバス

1. 科目名	建築の安全					
2. 教員名	村上正浩			3. 担当大学	工学院大学	
4. 対象学年	3 年	5. 開講時期	後期	6. 単位数	2 単位	

7. 授業の目的・到達目標（神）、授業のねらい及び具体的な達成目標（工）、授業の内容（基本的枠組）（東）※必須

【授業のねらい】

建築の防火安全対策と日常的な事故予防策を理解できるようになる。防火安全・消防法・消防用設備・防火防災管理の知識を身につけると同時に、出火防止計画・延焼拡大防止計画・防排煙計画・避難計画の考え方を習得する。さらには建築内で発生する事故を未然に防ぐための予防対策を学ぶ。

【達成目標】

- ・火災・消火の原理、消防法、消防用設備、防火・防災管理について説明できる。
- ・出火防止・延焼拡大防止・防排煙・避難に関わる計画の考え方を説明できる。
- ・日常的な事故を予防するための対策について説明することができる。

8. 授業のキーワード（神）

事故予防、消防用設備等、出火防止、延焼拡大防止、防排煙、避難

9. 授業の進め方（神）※必須

- ・授業は講義形式で行う。各回の授業までに講義資料や教科書の該当箇所を事前に読んでおき、理解しておくこと。
- ・授業の内容に加え、講義した内容についてコメントを求めることで、講義内容を理解しているか確認する時間を毎回の授業に設ける。
- ・各回授業後のコメントカード、建築の安全に関するレポート課題、最終の試験をあわせて、学習成果を評価する。

10. テキスト、参考書、指定図書（神）

○テキスト

指定教科書なし。講義中に資料を配付する。

○参考書

- ・「現代建築学 建築防災・安全」室崎益輝（著）、鹿島出版会
- ・「三版 イラスト建築防火」たかぎただゆき（著）、小林恭一（監修）、井上勝徳（監修）、近代消防社
- ・「はじめて学ぶ建物と火災」（社）日本火災学会編、共立出版
- ・「改訂版 イラストでわかる消防設備の技術」中井多喜雄（著）、赤澤正治・岩田雅之・西博康（改訂監修）、石田芳子（イラスト）、学芸出版社、など

11. 授業時間外に必要な学修（神）事前、事後に受講してほしい講義等（東）

【事前に受講してほしい講義等】

社会貢献学入門、建築・都市の安全、地域の安全、地震・複合災害工学

【事後に受講してほしい講義等】

災害復興論

12. 提出課題など（神）

各回授業後のコメントカード、建築の安全に関するレポート課題

13. 成績評価方法・基準（神）、成績評価方法及び水準（工）、評価の方法（東）※必須

授業内実施のコメントカードで平常点を算出すると共に、試験期間に授業内容すべてを範囲とする学期末筆記試験を 15 回目に実施、さらに課題レポートの提出を求める。平常点、学期末筆記試験、レポートは 1 : 6 : 3 で評価し、合計が 60 点以上を合格とする。

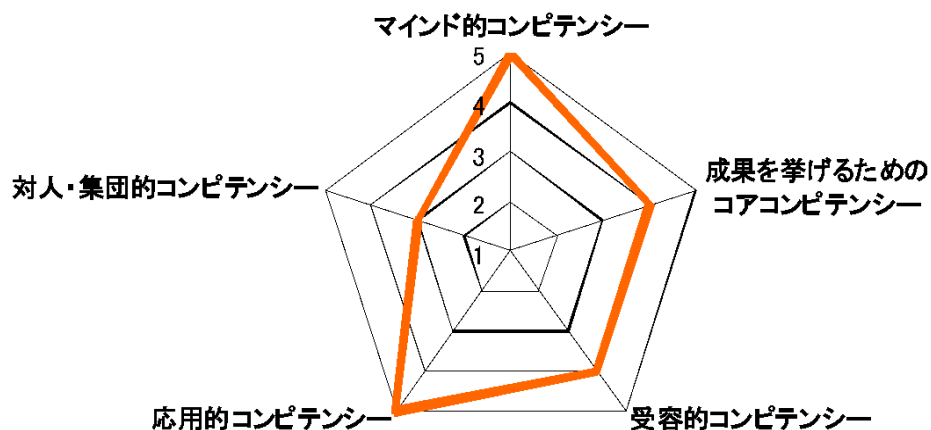
14. 履修するにあたって（神）、学生へのメッセージ（工）、受講生への要望（東）
15. 参考（ホームページ（神）、オフィスアワー（工）等）

【授業計画（神）（東）、授業計画及び準備学習（工）】

講義番号	主題	内容
第1回	ガイダンス	講義の進め方とレポート課題の内容・評価基準について説明する。
第2回	建築内の事故予防（1）	建築内で日常的に発生している事故の実態を理解する。
第3回	建築内の事故予防（2）	建築内で日常的に発生する事故を未然に防ぐための対策を理解する。
第4回	防火安全の基礎（1）	火災被害の実態と原因、火災の原理、消火の原理を理解する。
第5回	防火安全の基礎（2）	火災の延焼や煙の拡散の防止、防火安全に関わる法制度を理解する。
第6回	防火安全の基礎（3）	消防用設備の基礎を理解する。
第7回	防火安全の基礎（4）	消防法の改正等につながった過去の火災事例を学ぶ。
第8回	消防用設備（1）	自動火災報知設備の仕組みや設置基準などを理解する。
第9回	消防用設備（2）	消火器、屋内消火栓設備、屋外消火栓設備の仕組みや設置基準などを理解する。
第10回	消防用設備（3）	連結送水管設備、スプリンクラー設備の仕組みや設置基準などを理解する。
第11回	消防用設備（4）	特殊な消火設備の仕組みや設置基準などを理解する。
第12回	延焼防止計画、防排煙計画	火災の延焼防止、煙の拡散防止に関わる計画を理解する。
第13回	避難計画	避難に関わる計画を理解する。
第14回	防火・防災管理	防火・防災管理の考え方を理解する。
第15回	学期末筆記試験	学修到達度を確認する。

【コンピテンシー】

本講義を通して身につけることが期待されるコンピテンシーは、以下のグラフを目安にしてください。



コメント
本講義では、特に「マインド的コンピテンシー」と「応用的コンピテンシー」の向上を目指す。防災意識や情報活用力、課題形成力の向上に力を入れる。